

津村節子

ふれあう心

女の生きがいと
幸せの在処 ありか

津村節子

ふれあう心

女の生きがいと幸せの在処（ありがた）

大和書房

津村 節子 (つむら せつこ)

昭和3年 福井市に生まれる

昭和28年 学習院短期大学国文科卒業

昭和40年度上半期「玩具」により第53回芥川賞受賞

著書 「玩具」(文芸春秋)「海鳴」(講談社)

『夜光時計』『石の蝶』(新潮社)他

ふれあう心 女の生きがいと幸せの在処^{ありか}

1972年2月5日 初版発行

著 者 津村 節子

発行者 大和岩雄

発行所 ^{だい わ}大和書房

東京都文京区関口1~33

振替東京 64227

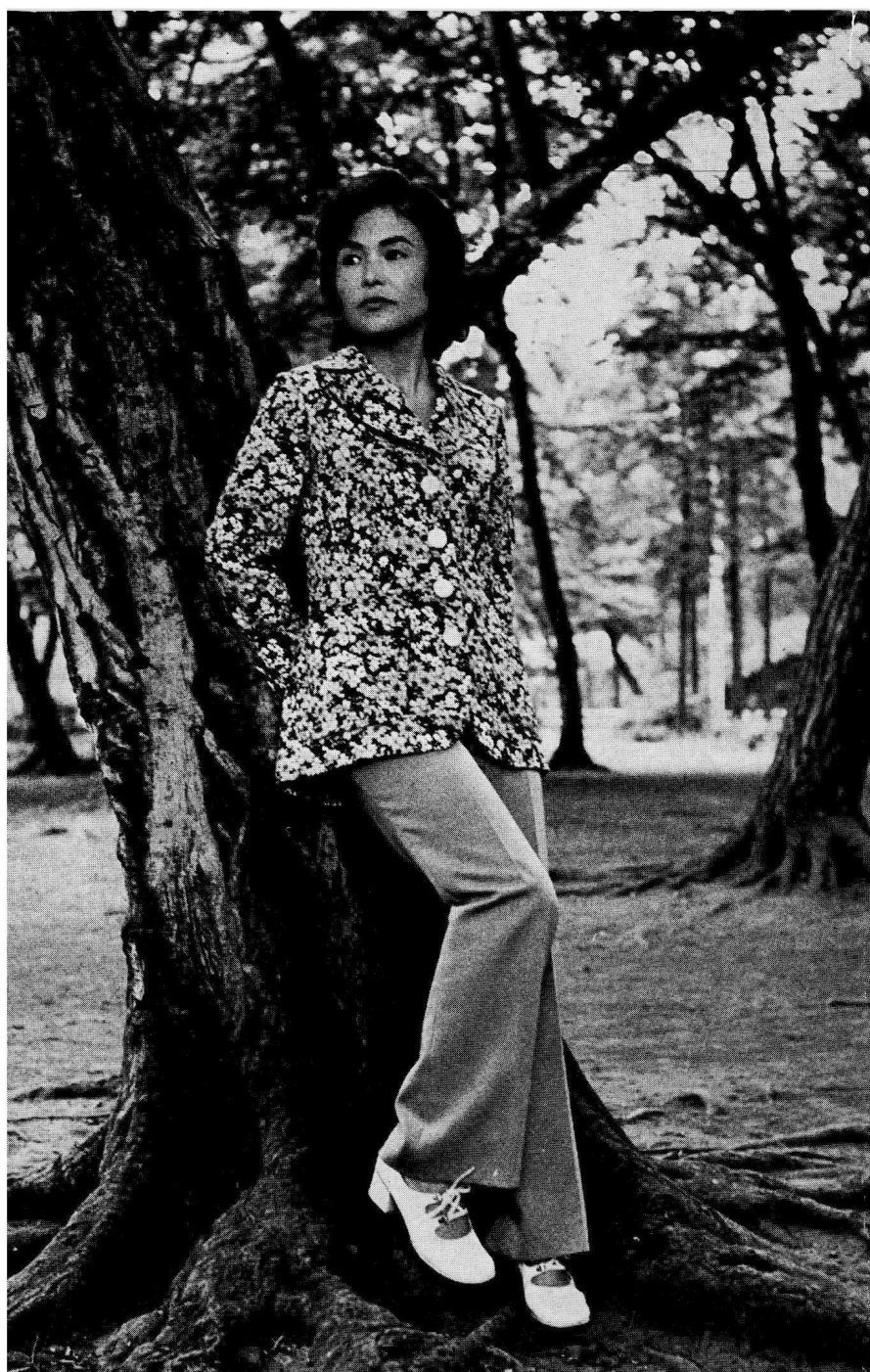
郵便番号 112

電話 (203) 4511~4

製版・印刷・弘済印刷 製本・美成社

落丁本、乱丁本はお取替えます 〈検印略〉 ©1972

0012-000470-4406



口絵写真「大法輪」提供

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目 次

I章 求める愛・みつめる愛

青春をつつむ夢と現実

結婚への憧れと現実―愛に挫折しないために 11

自分を見つめるということ―旅する心 16

若さの可能性と多様性―五つの青春 19

東京に出て来た少女

少女の商い

ある女子高校生の恋

見事なわかれ

女の独立とは

愛の飢えと孤独と―ある心の軌跡 34

生きてきたあかし―死に直面したときに 38

無駄をして得たもの―精一杯の生き方を 41

限りある“生”を生きる―一万日の人生 46

忘れられない“出会い”―私を勇気づけたひと 50

無償の愛について―探し求めた人 57

燃やしつくした「情熱」——ある青春の終り 61

Ⅱ章 人生の何を生きがいとすべきか

母として、妻として、女として

女が考えていること——底にひそむ心理と意識 67

女の残酷さ——育児に欠けている「忍耐」

女のよろめき——残るは不毛の焼野

女の虚栄で——果ては家族巻添え

女在教育観——わが子に託す人生

女の生きがい——時間があまり過ぎているのか？

大切なものを忘れていないか——親が持つ危険な側面 80

ものわかりいいママ

子どもを「奇型」にする親

「家庭的」ということ

虚勢を張る無意味さ——卒業式に思うこと 86

夫の浮気を知ったとき——妻として欲しい「優しさ」 89

ゆたかに育てる——本を読まない子のしつけ 93

柔らかな心を―過保護と子どもの自律 96

打ちこめるものを持つこと―主婦のスランプ療法 100

家にいる自由―何を生かすべきか 104

誇らかな喜び―生まれてくる命の重さ 108

求めるもの・求められるもの―危機を乗り越える指針 110

どう調和をとればいいのか―夫婦同業の功罪について 115

Ⅲ章 豊かな生活をつくるもの

日常のふれあいを大切に

心豊かに―本当のよろこびとは？ 125

“みどり”を取り返したい―生活をうるおすもの 127

だまされる仕合わせ―“信じる”ということ 130

合理的な生活とは―家計簿の効用 133

不意の客のもてなし―“気兼ね”しない交際の秘訣 137

短かい人生なら―“料理”だけがすべてではない 139

“贅沢”ということ―飢餓のなごりの世代 142

女の夢を托す―雛人形の思い出 146

現代っ子に“感動”を―祭りにうかれた頃 150

幼ない日の記憶―ふるさとの雪 154

季節を味わうこと―お正月を捜す 159

生きとし生けるものの詩―日々の生活のなかから 168

スズメの母と子

たそがれの出発

小鳥と私

カニと子供

小説を書くとき

ゴンドラの中で

明快な死を

“愛のムチ”というもの―ある先生との出会い 180

人間の善意とは―幸せを運ぶ人 185

悔いなき人生―恋に生きる女 188

自分が必要とされている……棺までの信念 192

Ⅳ章 “いのち”ある限りに

人生への絶えざる思い

“全力投球”の美しさ——リングの上の戦い 199

“いのち”への思い——母の蠟燭 204

ひとの死に直面したとき——もの言わぬ顔 208

“老い”ということ——人生の縮図を見る 211

限られた“生”だからこそ——躁鬱病と私 215

気分転換したいときに——旅の効用 220

思い浮かぶ地の果て——旅にゆけない日に 223

人生とは“放浪”の旅か？——さい果ての海に来て 226

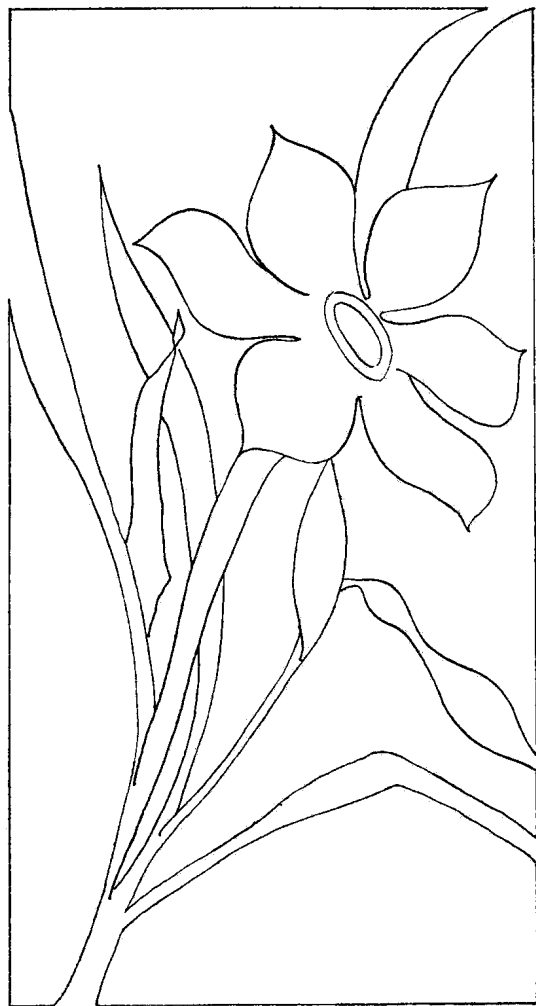
人間の愛と悲しみと——賽の河原に来て 230

あとがき 237

装幀 カット 代田 舜

I 章 求める愛・みつめる愛

青春をつつむ夢と現実



結婚への憧れと現実―愛に挫折しないために

某新聞社の社会部記者だった若い男性が、女性雑誌の編集部に籍を置くようになってからややしばらくして、

「女の子っていうのは、どうして結婚のことばかり考えているんでしょうね。人生の最大目標が結婚なんですからね。だから、女性雑誌は結婚特集号を飽きもせず繰返す。それさえやれば売れるんですから——」

と呆れたように言っていた。

男性雑誌では、色刷りのヌード写真だの、ガールハントの穴場だの、女子高校生の性意識だのというセクシーな記事は多いが、結婚をテーマにしたものは皆無である。男性にとって結婚とは社会生活を送る上で、また合法的に性欲を処理する上で、また種族保存の上から必要であると考えられているのだろうが、それが人生の最大目標と思っているような男はまづいない。

これまで女性は経済能力がなかったから、いつまでも家にいれば家の負担になり、世間体

も悪かった。従つて結婚を永久就職と考え、自分の人生を託すのに、できるだけ将来値上り確実な優良銘柄を漁^うろうと汲々としたのも無理からぬことである。

結婚によつて女の人生が左右されるというサンプルに、学生時代秀才のほまれ高かった人が、のんだくれで、女性にもだらしない男と結婚して、見るも無惨^{むざん}にやつれ果ててしまつていたり、クラスではいるのかいないのかわからぬくらい目立たなかった人が、有能で、出世街道まっしぐら、家ではこれまた理想的な夫であり父親であるというような男性をひきあてたばかりに、輝くばかりに美しくなっている例をよく見る。

これまでの社会では、女は、どんな才能や可能性があつても、夫運が悪ければ幸福にはなり得なかつたのだ。

この結婚は失敗だつたと気づいた場合でも、結婚することだけを目標にしていた人たちは、子供を抱えて生活してゆけるだけの技術や資格を身につけることをしなかつたために離婚に踏み切れず、恨みつらみを胸にのみ込んだまま忍従の一生を送つていたのである。

豪華なウエディングドレス、ロマンチックな化粧台や衣裳ダンスやベッド。ショッピングにも、またお芝居へ行くにも交通の便のいい、しかも近くに散策するのに適した公園などもある白いシャトーのようなマンション――。

若い女性の結婚の夢は、結婚相手の男性もないのに、限りなく、果しなくひろがつてゆく。結婚に憧れながら、結婚の実態を知ろうとはしないのである。

結婚に対して、期待が大きければ大きいほど、失望の揺れ返しは大きい。自分の欠点など棚にあげて、こんな筈ではなかったという不満が噴き上げる。相手だって、自分にどんなにか失望しているに違いないと思ひ遣る謙虚さが無いから、あっさり離婚する。相手の欠点はどうしても人間として許せぬものかどうかを見極めもしないし、自分の欠点を直そうという努力もしない。

はしかのような恋愛時代に、相手をよく見極めよと言うのは無理な注文かもしれないが、それでもなおかつ、まったく盲目になってしまわずに、いくらかの冷静さを残しておいて欲しい。デパートへブラウスを取り換えに行くように、簡単に離婚を繰返すのは、失うものばかり多くて、結局自分自身が瘦せ細ってゆくことなのだ。

最近、幼な妻というのがはやってきている。いや、私の祖母の時代は、殆ど幼な妻だった。十五、六歳で適齡で、二十歳になつたらもうオールドミスだった。

しかし、その時代は家と家との縁組という考えが強く、従つて相手方の家柄、財産、人物、お互いの相性など、親たちが克明に調査し、うるさく干渉して決めた。その家、その家に家風というものがあり、ベテランの姑がいて、嫁を教育した。そのためには、なにもわからない素直な、なるべく若い嫁がよかったのである。

いまどき、結婚は家と家との縁組だなど思っている人はいるまい。個人と個人が、お互いの不足を補い合い、力を合わせて新しい家庭を作り上げるのが結婚である。親同士が決め

た縁組なら、失敗した場合その責任を親たちに向けることができるが、自分たちで決めた結婚は、自分たちで責任をとらねばならない。

まだ人生経験も乏しく、異性を見る眼などまったくない若さで、一生を託す相手を決める大胆さに私は目を見張ってしまふ。この頃の若い人たちは肉体的な成熟が早い上に、街には性の刺戟が氾濫しているから、衝動的に結婚へ突走ってしまふのだろうが、人間の寿命が伸びて七十歳も八十歳までも生きるというのに、そんなに結婚相手を早く決めてしまふことは、どんなものかと思う。

適齢期という言葉も、もうそろそろなくなっているのではないだろうか。男も女も、いくつになっても結婚してもいいと思う。

私はいま某誌の仕事で、毎月四十代の言わば仕事に脂の乗り切っている女性たちにお会いして、その生き方を綴っているが、その中には独身の人たちも多い。

彼女らは男性を凌ぐ活躍をしており、しかも女性として溢れるような魅力たたえている。無論慕い寄る男性は数知れずあるらしいが、自分の仕事がスポイルされるような結婚はしたくないという理由で独身を通してゐるのだ。決して婚期を逸したために、男性が振り向かなくなつたのではない。

家族制度が崩壊し、嫁はその家の家風に馴染みさえすればよかった時代は過ぎた。自分たちで新しい家を築いてゆくためには、男性も、ただ若くて、何も知らない女性を思いのまま